

朝鮮

墓標なき凍土の墓地

東京都 赤尾 覺

咸北・會寧に避難命令下る

「ヒナーン……ゼンインヒナーン……」という不安をかき立てる拡声器の音が悲鳴のように響いたのは、夕食にとりかかろうとしていた矢先だった。昭和二十（一九四五）年八月十三日午後七時、朝鮮咸鏡北道會寧^{むぎ}邑の大通りを「全員避難」を指令するトラックが走り回った。やがて、潮騒のような慌ただしい足音が町中から聞こえて、どこへともなく消えていった。炊き上がったばかり

のご飯を箆にひっくり返して風呂敷に包み、当座の着替えと寝具を担いで、私たちの一家も置き去りを食ったような思いで、急いで家を飛び出した。

この年の四月、會寧公立商業学校三年に進級した私は、大日本紡績清津工場に勤労働員で駆り出されていたが、八月九日早暁、ソ連機の空襲を受けた。当初、それは米軍機の空爆だと思っていたが、昼近くになって、「敵機を十四機撃墜した」という戦果と共に、来襲したのはソ連機でソ連が参戦したらしいという、うわさが流れ出した。だが、日ソ中立条約があるから、ソ連が参戦するはずがないという否定的な意見もあった。中学三年の私たちにとって、戦争はまだ遠い南の島の出来

事でしかなかったが、すぐ北の国境地帯が戦場となり、足元に火がついた。そして、ソ連機の空爆が私たちの別の戦争の始まりの予鈴だったとは、そのときは知る由もなかった。

八月十日、動員先の清津から、ほうほうの体で會寧に逃げ帰り、すぐに歩兵七十五連隊の勤労作業に駆り出されていた。十三日午前八時、練兵場に集合した私たちは作業中止を告げられて、やっと骨休めができると喜んだ。家に帰る途中、駅の方から駅前通りをのろのろと歩いて来る大勢の避難民の群れに出会った。それは雄基、羅津、阿吾地、慶興などのソ連との国境地帯から逃げて来た避難民だった。その異様な風体を見て、私たちは北の方で異常な事態が起こっていると実感させられた。友だちといつものように別れの挨拶をして家に駆け戻ったが、それが友だちとの長の別れとなった。その避難民たちと同じ運命が、夕方には私たちの上にのしかかってきたのだった。

會寧を避難・脱出したときの私たち一家の家族

構成は、両親と會寧商業三年の私、高女一年と国民学校五年の妹、就学前の弟、三歳と八カ月の妹の八人家族だった。上の三人の兄は大邱、ハルビン、博多と家を離れていた。

永綏という會寧の次の部落で一泊して、翌日から避難行が始まった。取りあえず豆満江に沿って茂山の方を目指すことにした。大陸性気候の北朝鮮の夏の気候は厳しい。昼間は三十度を超す炎熱、夜間は十度程度の気温となる。大人たちは「どうせ張鼓峰事件のときのように一週間か十日くらい山の中に隠れていれば、すぐ停戦になるさ」と高を括っていた節もある。

私の父は当時、會寧朝日国民学校（前身はカナダ人経営の朝鮮人普通学校・信興普通学校）の校長だったが、以前勤めていた雲頭普通学校の父兄会長の家に、避難させてもらうつもりだった。そこは金帝国の山城で、南宋の徽宗皇帝が幽閉され崩御したと伝えられる五国城の近くの雲延里という部落だった。

目的の家の崔さんは、「山の中に洞穴を掘って隠してあげる」と言ってくれたが、翌日昼近く東の山の彼方で爆発音がして、黒い煙が沸き起上がった。向かいの山道を、日本軍の兵士と軍馬の列が南に移動していた。家を飛び出した父は、「會寧の陸軍飛行場を爆破したらしい。日本軍の將校から、ソ連軍が近づいているので急いで南に逃げるようにと警告された」と帰って来た。結局、崔さんの好意を振り切って、戦場になるという吉州の南に退避することになり、本格的な避難行が始まった。

子供連れの家族の歩みは遅々として進まない。子供は泣きわめきながら親の後ろをついて行く。一日の行程は、二里から三里がせいぜいだった。山中の大きな木の下に敷かれた布団の上に老人が寝ていた。悟りきったような目で、そばを通る避難民を眺めていた。「足手まといになるから」と、自分から望んで置き去りにしてもらったのだろう。老人が敷いている布団が、家族のせめても

の思いやり、悲しい心情を物語っていた。

両手に持った杖にすがりついて、一步一步歩いている老婆がいた。背中には小さな風呂敷包みを背負っている。避難民の群にはすぐに追いつかされたが、次の日の朝には私たちの前を歩いていた。

両膝から下のない三十代の男が手製の台車に乗り、ポロ布を巻いた両手で地面をこいでいるのに出会った。山の坂道をどんなにして登ったのだろうかと、暑さも忘れて感心したのだった。

このような寸景を尻目に、避難民は黙々と南を目指して歩いていた。

終戦・そして炎天下の避難行

終戦を知ったのは、茂山郡龍川洞の国民学校の教室に泊まった日、八月二十日ごろだった。川に洗濯に行った母が、「朝鮮人の警察官が『戦争は終わった』と告げ回っている」と報告した。父は、「警察官ともあろうものが、流言飛語を流すとはけしからん」と、憤慨した。しかし、その翌

日、満州・延吉から特命を受けて朝鮮に来たという、関東軍の曹長から、「煙草を一本恵んでほしい」と言われた父に、「日本は無条件降伏しました。陛下がラジオでそのように告げられました。一刻も早く、一步でも遠く南の方へ逃げられたほうがよろしいでしょう」と警告した。それでも父は半信半疑のようだった。

次の日の夕刻、茂山に着いた。町はもぬけの殻で、駅の待合室に「ソ連軍が接近したので、列車輸送は中止する。各自白茂線に沿って南下せよ。道防衛本部は延社に移動する」と掲示されていた。

二十三日、ソ連軍は新站まで来た。引揚げ後に水死した同級生の宮崎弘造君に、南山洞という部落でばったり出会ったが、「帽子の白線は取ったほうがいいぞ。そんな帽子をかぶっていると、兵隊と間違えられて捕虜になるぞ」と叫んで走り去った。

茂山を出て四日目、延水という村の入口には赤旗と太極旗が交差して掲げられていた。このころ

になると、腕に赤い腕章を巻き、日本軍の軍服を着て、帽子に赤い星を付けた朝鮮人の保安隊が出現していた。隊員が「荷物検査をする」と言う。検査が済んで立ち去ろうとしたら、隊長らしき男に「国旗に敬礼していけ」と怒鳴られた。日本の敗戦を実感した一瞬だった。

村はずれの川原で炊飯しようとしていたときに、山の陰から突然トラックの轟音が響き、その後ろから朝鮮人が打ち鳴らす銅鑼や鉦の音が追いかけて来た。トラックの運転台の屋根には機銃が据え付けられ、荷台には灰色の軍服を着たソ連兵が陽気に歌っていた。川原にいた日本人避難民は、一斉に荷物を抱えて、付近の楊柳の林に逃げ込み息をひそめた。

二十六日午後四時過ぎ、待望の延社に着いた。警察署の武徳殿の中庭には、避難民が群がりあふれていた。延社には一時、六千人近くの避難民が集結していたという。渡部威鏡北海道知事をはじめ道庁の主だった幹部は、ソ連軍に逮捕されて、ど

こへともなく連れ去られていて、避難民は自分自身で身の振り方を決めなければならなくなっていた。列車輸送に望みをかけて延社を目指していた避難民は、重い腰を上げて南へ向かって歩き出した。

茂山から白岩までは標高一千メートルの高原で、白茂高原と称されていた。昼間はフライパンの底にいるような炎暑だが、夜間は気温が急低下する。灼けつくような道路を、黄塵を巻き上げながら南下する。茂山までの道程では、泣いて親の助けを求めていた子供たちも、もう泣く気力もなくなり、泣いたところで親が優しい言葉をかけてくれるわけではないことも分かり始めていた。羅津、雄基、慶興、阿吾地など国境の戦場地帯から避難して来た人たちも、捨てられた荷物を拾うなどして、生活に必要な最低限の物は取り揃えていたようだった。

延社から三社、延岩、島内と線路伝いに歩き、九月四、五日ごろ威鏡山脈の中で、駅としては一

番高い所にあるという六合駅に着いた。ホームには「海拔一千四百メートル」と記した標柱が建っていた。すべての山の頂が目の下にある。夕日が足元で揺れていた。

朝鮮人の駅員の話では「間もなく初雪が降る」と言う。「白岩に行っても列車は出ないだろう。吉州の方に下りた方がいい」と駅員に忠告され、教えられた近道を合水に向かった。山道は四十五度以上の急坂で、立っていることはできない。大きな木の枝を何本も折り重ね、その上に乗って一気に滑り降りた。

合水は、許可阿片の栽培地だった。朝起きて見ると、一面のケシ畑だった。合水から陽谷、蛇島を経て載徳では二日間雨に降り込められ、国民学校の教室で過ごす羽目になった。静かな雨に、思ひもかけぬ骨休めとが、會寧を脱出してからの日々と、これからの成り行きを考えさせる心のゆとりを取り戻させた。會寧を脱出したとき、「吉州の南に逃げ、戦争が終わったら會寧に戻る」

という情報は、いつの間にか夢物語になっていた。

教室にしかれた筵むしろの上で、父は「結局、日本に帰らなきゃならんということになるなあ！ まあ日本に帰れば、あばら家でも家はあるし、芋や魚、貝、海藻を食って何とか生きていけるだろう」とつぶやくように言った。曖昧な言葉だったが、これがその後の私たち一家の行動指針となった。

載徳で、幸運にも貨物列車にありついた。吉州は昔から「思想的に危険な所だから行くのは止めよう」と言う父の意見で、南夕で列車を降り、蘆洞から歩いて六日目に潮の香りのする城津にたどり着いた。會寧を脱出して一カ月近く、約三百キロメートル余りの徒步行軍だった。九月十五日のことだった。

城津は、ソ連兵による略奪、暴行、強姦などの無法地帯と化していた。城津国民学校の廊下に隙間を見付けてもぐり込んだ。夜、ときならぬ騒音

で飛び起きた。ソ連兵による女さらいの襲撃だった。校舎中の避難民が、一齐に鍋・釜、洗面器などを打ち鳴らし、あらん限りの声を上げて叫んでいる。鳴り物のない者は廊下の床、壁の羽目板を棒で打ちたたいた。こうすると、驚いて逃げ出すソ連兵もいたし、ソ連軍の憲兵や朝鮮人の保安隊員が駆けつけるといふ。このような騒動はその後、威興などでも再演されることになった。

だが、この夜のソ連兵は凶々しくも、三千人の大喚声を気にも掛けず、窓の外に向かってマンドリン（自動小銃）をぶっ放した。威嚇射撃に避難民たちは一瞬ひるんだが、逆上して叫び声はさらに激しくなった。しかし、抵抗虚しくこの夜は、三人の若い女性が拉致されたという情報が次々と伝えられてきた。

ソ連兵の襲撃に備えて、若い女性は黒髪を切って丸坊主となり、汚れた男物の服を着て、顔には鍋釜のすすを塗っていた。教室の床下に筵を敷き、夜になるとそこに隠れる女性もいた。運悪く

ソ連兵に捕まったが、その手を振り切って便所の便壺に飛び込んだ女性もいた。ソ連兵が去った後、男たちが女性を引き上げ水をぶっかけて洗うなど大騒ぎだった。臭気はしばらく抜けなかったらしい。

三日目に勤労作業に駆り出された。校庭に集まったところ、朝鮮人の監督から「お前は子供で役に立たないから帰れ」と除外された。作業は日本高周波重工業城津工場の設備を取り外し、ソ連向けに船積みする仕事だった。

大半の避難民が、一週間から十日以上も待機させられていたというのに、私たちは、四日目に列車で南に送られることになった。列車は、牛や馬を輸送する家畜用の有蓋貨車が十四、五両連結されていた。牛馬の糞尿の臭いが染みついていたが、炎天下を歩くことを思えば天国のようなものだった。貨車には城津在住者も一緒に詰め込まれていたが、年配の在住者の女性は、「避難民は臭くてかなわないわ。窓は開かないの」とあからさ

まに嫌な顔をした。そのとき初めて、我々は「避難民」という身分に転落したのだと思い知らされた。城津在住者はさっそく重箱を開いて食事を始めた。避難民の子供たちは、食い入るようにその口許を眺めていた。私は、「あんたらも、すぐに避難民になるさ!」と心の中でつぶやいた。

しかし、避難民も少し浮かれた気分になっていた。当時、會寧から京城(ソウル)まで急行で二十五時間くらいだった。城津からなら十五時間、遅くとも二十時間で京城に着く。そうすれば二、三日で日本に帰れるはずだった。

祖国への夢と希望を乗せて、貨物列車は日本海を左に見ながら、途中停車を繰り返しながら南へと走った。

威興での越冬・避難民生活

九月十九日夕方五時過ぎ、列車は威興に停車した。そして「列車輸送はここまで」と、保安隊員に尻をたたかれながら降ろされ、京城への夢は一日でついでてしまった。駅前広場には貨物列車二

編成・約三千人の避難民が野宿することになった。広場の隅で、この夜も小さな騒ぎがあった。ソ連兵の襲撃があり、孫娘を拉致された祖父が抵抗して射殺されたといううわさが翌日流れてきた。

九月二十日の朝だった。突然、「午前十時までに広場を退去せよ。退去しない者は銃殺する」という布告が出された。「これはゲーペーウーの命令だ！」という尾ひれがついていたので、広場は騒然となった。そのころゲーペーウーとはソ連秘密警察のことで、怖い組織だという程度の知識しかなかった我々は、その後も、この言葉には畏怖の念を抱かされた。

威興のメインストリート軍営通りには、朝鮮人が並んで避難民の行列を見物していた。城川江に架かった万歳橋を渡ったところの新上里では、日本兵の捕虜の一団に出会った。日本兵は真新しい軍服、軍靴、装備だったが、護衛のソ連兵の方は汚れた灰色の軍服に木靴を履き、マンドリン（自

動小銃）を肩に掛け、ヒマワリの種をかじりながら傍らを歩いていた。避難民は立ち止まって「どちらが捕虜か分からない」と口々に言った。日本兵たちは陽気だった。「僕たちは、興南から一足先に日本に帰ります。あなたたちもすぐに帰れますから、元気で頑張ってください」と言いながら、子供たちに乾パンやリンゴを手渡ししてくれた。

威興駅前広場から追い出された避難民は散り散りとなり、威興郊外二里ほどの元興里の川原には、二百人余りの避難民が滞留していた。大半は元山目指して歩いて行った。元興里の川原に残ったのは、威興に戻り列車で南下できると期待したからだったが、野宿するには夜間の寒気は身に沁みた。あいにく雨も降りだし、夜中に川が増水して大騒ぎになった。翌日、焚き火をしている人がいたが、焚き火ではなく夜中に死んだ子供の火葬をしていたのだった。「薪が湿っていて、うまく火葬できない」と嘆いていた。

三日目に威興日本人世話会の役員が来て、威興に連れ戻された。細かい雨の降る中をとぼとぼと歩いたが、心の中では「いよいよ威興から汽車に乗れる」と喜びに胸が膨らんでいた。

威興にたどり着いたのは夕方だったが、それから威興在住者の民家への割り当てがあり、盤龍台町の福田さんの家の四畳半の部屋に入ったのは、八時過ぎだった。四畳半に、私たち一家八人と會寧の小柳さん夫婦の十人が生活することになった。狭い部屋でどのようにして生活するかという心配よりも、これで野宿せずに人並みの生活ができるという喜びのほうが大きかったし、どうせ汽車に乗るまでの仮の宿だという思いもあった。

私は部屋を照らしている電灯を眺めた。ただ眩しかった。四十日ぶりの灯だった。民家を割り当てている威興日本人世話会の役員に、母が「今日は何日ですか」と尋ねたところ、「秋季皇靈祭ですよ」という答えが返ってきたから、その日は九月二十三日だと知った。

福田さんが三組の布団を貸してくれたので、私たち一家は二組の布団に前後左右から体を潜り込ませた。「一週間もすれば、汽車で南へ送られるだろう」と、安どの思いで久しぶりに安らかな眠りについた。

九月末現在で、威興には二万七千人の咸北避難民が流れ込んでいた、とのことだった。それから「九月末に汽車に乗れるらしい」「十月初めだ」、さらには「十月半ばになったららしい」「いや十月末は確実らしい」と、次から次とあえない希望を抱き、流言に翻弄されながら、十カ月近くの越冬避難民生活を送ることになった。流言飛語、単なるうわさに過ぎないと思いつながら、それは生きるためにすがりつかねばならない希望だった。

翌日から、四、五日は新しい生活の場作りで忙しかった。まず部屋の出窓から出入りするため、空き箱で階段を作った。ソ連兵の襲撃に備えて、裏口の戸は使っていなかったが、さらに頑丈に補強して我々が出入りすることにした。出窓に四、

五個の空き缶を吊し裏口の戸まで紐を引き、この紐を三回、少し間をおいて二回引き、空き缶を鳴らしたら戸を開けるように合図も決めた。裏口に便所も作った。穴を掘り樽を埋め、板を二枚渡し、粗筵で囲った。冬に向かい糞尿は凍るので、六尺棒で突き崩し、決められた日に塊を道路に置いておくと、清掃係が運んで行った。

南下列車に乗るための、しばらくの間のことだとは思いつながらも、取りあえず明日からの食べ物心配をしなければならなかった。

九月末、落ち穂を拾い集めて一升瓶でついて精米し、田んぼでイナゴを捕まえておかずにしようと、咸興郊外の新興里に母と二人で出掛けた。私は「リンゴを仕入れて市場で売ったらどうだろう」と提案した。朝鮮人農家へ相談に行ったところ、中年のオモニは「リンゴの時期は終わった」と言い、「何をしているのだ」と聞いた。「落ち穂を拾っていた」と答えると、納屋から箆に二升ほどの米を持って来て、「落ち穂を捨てて、これを

持って行け」と袋に入れてくれた。農家から出たところで、母は「背に腹はかえられんから、乞食でもしようか?」と言い、翌日からさっそく乞食稼業を始めた。朝鮮人のオモニは母の背中の妹を指差して「子供がかわいそうだ。子供に食べさせろ」と、米や粟を一升、二升と恵んでくれた。もらった食糧の担ぎ役として後ろについて行く私は惨めな思いだが、他に何の算段もないので「みっともないから止めよう」とは言えない。十月半ばになると避難民の乞食が増えて、あちこちで鉢合わせする状態になった。また親切なオモニの手に負えなくなり、追ひ払われるようになった。そのころには、半畳の押し入れの中に四カ月分くらいの米、麦、粟を備蓄していた。

盤龍台町の西側の桜丘には旧陸軍官舎が立ち並び、ソ連軍の将校が住んでいた。その生ゴミ捨て場も、避難民の食べ物調達場だった。そこには、ジャガイモの皮をはじめ野菜の切れ端、明太魚の頭などが捨てられていた。朝早く避難民が

やって来て、それらを拾っていた。

市場での物売りも避難民たちの生活手段だった。首から紐で吊した板の上に、餅や煙草などを並べて立ち売りしていた。「私は目が見えません。餅を買ってください。お代は缶に入れてください」と書いた紙を首に吊した、盲の女性が餅を売っていた。煙草の箱は新聞などの故紙で作られ、それぞれに「帰還」「祖国」「ダモイ」などの文字が、イモ判で押されていた。

乞食稼業を止めたばかりのある日、母が「縄や紐を持ってついで来なさい」と駆け戻って来た。

道々での母の話によると、空き家の陸軍官舎に沢山の薪が積んであったので、歩哨らしいソ連兵に薪を指差して「ダワイ、ダワイ」と言ったところ、「ハラッショ」と答えたという。「ソ連兵の気が変わらんうちに、あれを全部もらってしまおう」と言うのだった。私たちは薪を担いで往復した。あと一往復というところで、ソ連兵の歩哨が交代していて、朝鮮語で「カラー、カラー」と追

い払われた。

母から「あなたは薪の束を作りなさい。私たちが市場で売るから」と言われ、私は薪屋商売をすることになった。市場に出掛けて薪の束の大きさを調べ、福田さんから鋸と斧を借りて薪の束を作った。薪は一束五円で飛ぶように売れた。その後、私は公園などに行き、薪の材料拾いに専念した。ソ連兵が孔子堂を取り壊しているのに出くわし、柱屑を持ち帰った。柱の朱塗りの部分は自家用にして、他は薪の束にしたこともある。

男たちには「立ちん坊」という仕事があった。

早朝、市場の入口に立っていると、朝鮮人がやって来て働き手を募る。農家の下男、土方などの肉体労働で、お互いに相談し、条件が合えば朝鮮人のあとについて行く。私も一度行ってみたが子供仕事はなく、まるきり相手にはされなかった。

同居していた小柳さんは、葬儀屋の仕事に就いていた。死者が出ると遺体を粗筵でくるみ、荒縄で縛る。こも包みの荷物のような遺体は、一度興

福寺というお寺に集められ、二十体ほど集まったところで大八車に積んで、盤龍山の麓の墓地に運ぶという仕事だった。

このように避難民たちは、それぞれに生活の糧を求めて、南下移動が始まるまで懸命だった。

十月初め、會寧で青果店を営んでいた姜さんの長男が、「世話会で聞いてきた」と訪ねて来た。姜さんとは前に咸興を一時追い出されたときに、万歳橋の上で、ばったり出会っていた。「口減らしにお子さんを一人預かりましょう」という姜さんの申し出で、長女の幸枝を預けることになった。姜さんは、元興里の川原から一キロメートルほど西で、リンゴ園を営んでいた。

十月に入ると、そろそろ死亡者が増え始めた。発疹チフス、再帰熱がはやりだした。再帰熱はソ連兵が持ち込んだシベリアの風土病といわれ、一週間ほど三七度以上の高熱が続き、その後一週間の平熱期のあと、また一週間の高熱期に入る。この二回目の高熱期に老人、幼児、病弱者は死んで

しまう。発疹チフスと違って赤い発疹が出ない。いずれも虱が媒介していた。十二月に入ると、これらの伝染病に加えて、飢えと凍死で死者は急増した。

十月の二十日ごろ、各町内の男子は日本人世話会から勤労作業に動員された。盤龍台町からも、百人近く男たちが駆り出された。スコップ、ツルハシ、鍬などをそれぞれ担いで、敗残兵のような行列が咸興の北に聳^{そび}える盤龍山の麓に向かった。そこに着くまでは、どのような作業をやらされるのか、知らされていなかった。盤龍山の麓に幅二メートル、深さ一・五メートル、長さ二百―三百メートルの塹壕が、すでに幾重にも掘られていた。それは、我々より以前に勤労作業に来た人たちの労作だった。「これから死ぬ人たちのための尊い仕事です」と言う日本人世話会の役員の説明で、初めて塹壕式の墓穴を掘るのだと知った。作業をしながら、一人の青年が「てめえの墓穴をてめえで掘ってりや世話ねえや!」と言った。それ

には誰も何も言わなかった。

咸興日本人世話会は、年内に日本人送還はないと判断して、越冬ということになったら、三千人の避難民が死亡するだろうと想定していた。冬になり、地面が凍結する前に墓穴を掘っておこうと計画したのだった。しかし、この想定数は外れ、実際は、翌年四月までに避難民の死亡者は六千三百人（咸興日本人委員会活動報告書）を数えた。

墓穴掘り作業が終わって、緑色の五円の軍票を一枚もらった。帰って来た私に、父は「どんな仕事だった！」と尋ねたが、軍票を母に手渡ししながら、私は「墓穴掘りだったよ！」とぶっきら棒に答えただけだった。

十月末に、咸鏡南道警察部警部だった福田さんの小父さんが、保安隊に拘引された。この時期には、四十五歳以下の官公吏が逮捕され、満州・延吉に送られた。「男手がいなくなるので、あとはよろしく」と言い残して連行された。父は四十五歳を三つ過ぎていたので、拘引を免れたのだっ

た。

十一月二十日ごろ、まず父が再帰熱で倒れ、続いて妹、弟が病床に伏した。そのうえに、日本人世話会から「咸鏡南道人民委員会の指令で十二月二日に富坪に移住せよ」という通達が来た。それには移住しなければゲーペーウーに銃殺されるといううわさがついていた。小柳さん夫婦は、いざこともなく去って行った。母は、転居先を求めて駆けずり回ったが、朝日町の市場の近くの収容所で、一畳の隙間を作ってもらえただけだった。母は「一畳に八人がどうして生活できる」と思案したが、「知らん顔してここにいなさい」と言う福田さんの好意に甘えて、銃殺を覚悟で咸興に居座ることにした。

十二月二日は朝からみぞれ霽まじりの小雪が舞う冷たい日だった。私たち一家は布団を頭からかぶり、寒さと恐怖に震えながら、息をひそめて一日を送った。だが日本人世話会の役員さえも現れず、夜になってほっと安どの息をついた。一週間ほど

は安心できなかったが、地区委員からはただ「避難民のくせに横着だ」と、罵倒されただけだった。その翌日には、世話会は「威興日本人委員会」に改称したから、避難民どころではなかったのかもしれない。富坪に移住した避難民の惨状は、その後、相次いで威興にも流れてきた。その度に、「あのとき、富坪に行っていたら、一家全滅していたかもしれない」と、肌が粟立つ思いがした。

富坪に移住した避難民約三千二百八十人のうち、四百人が南方に逃亡、翌年五月までに一千四百三十一人が死亡、二人に一人が死ぬという、北朝鮮最大の悲劇の地となった。昭和二十一年一月半ば、富坪の実情調査に赴いた調査団員の一人、李相北檢察部情報課長は、「富坪避難民の宿舎、前日本軍演習場廠舎は実に呪われたる存在なり。それは実に、煤煙と、あまりの悲惨さに涙を禁じ得ない飢餓の村、死滅の村」であり、「二十世紀の惨事」であると報告している。

十二月十一日の早朝、母の悲鳴にも似たような声で目が覚めた。父は韃たつのような激しい息をしていたが、それがぼったりと止んで息が絶えた。私は、その日から再帰熱の第二高熱期に入った。葬儀屋が父の遺体を引き取りに来たとき、私は高熱であえいでいた。影絵のように二人の男が立ち、働いているのをうっすらと覚えている。しかし、父が盤龍山のどこに埋められたか分からない。

十二月二十日過ぎに、私は二回目の高熱期を脱して平熱期に入った。しかし、下から二番目の妹の昌子は、二十八日早朝に息を引き取った。父の遺体にはついて行けなかったから、「昌子だけは埋めに行つてあげようよ。墓地の場所はあなたしか知らないし」と言う母の願いに従つて、粗筵と荒縄を抱えて母の後ろについて行く。筵はせめて新しい筵にくるんでやりたいと、母が朝鮮人の農家の家に行つて、もらってきたものだった。平熱期に入つて一週間の私は、まだ便所の行き来もままならぬ状態で、足元がふらついて心許なかつ

た。

盤龍山にはうっすらと雪が積もっていた。墓地に着いた私たち二人は、昌子の遺体を置いて帰る決心がつかず、お互いに「ここは場所が悪い」「道に近すぎる」「遺骨を拾いに来たときに分かりにくい」などと難癖をつけては、辺りをうろろろと歩き回った。墓地の管理人風の青年がやって来て、「僕がやってあげましょう」と手早く筵にくるんでしまった。筵にくるまれて、一個の荷物になった昌子を見ると、また新たな涙がわいてきた。墓穴には、二段に筵包みが積み重ねられていた。青年は「墓穴が足りず一段の予定だったが、二段、三段とびっしり詰めて埋葬することになった。この墓穴も、あともう少し埋葬者を入れるから、二、三日して土をかぶせることになる」と言った。母は「かわいそうに、こんな冷たい所に一人で置いていって、ごめんよ」と、凍った地面に爪を立てて号泣した。

こうして昭和二十年は暮れた。除夜の鐘の代わ

りに、銃声があちこちで響いていた。

病みあがりの私は、熱がぶり返し再び寝込んでしまった。一月は熱にうかされて、うつらうつらと過ごした。

一月末に、ソ連軍からの食糧配給が避難民だけに始まった。大人も、子供も、一律に一人米四合、大豆二合だった。後に米二合、大豆一合になったが、避難民たちは「ソ連は共産主義の国だから、大人も子供も平等なんだ。こんな平等なら大歓迎だ」と言い交わしたものだ。

二月十日ごろ、朝日町の市場の入口に、日本人委員会の直営商店十五店が店開きした。避難民にとって、それは朗報ではあったが、半面、帰国が遠のいたのではないかとという危惧を抱かせた。帰国が近いのなら、そんな店は必要ないはずだったからだ。

三月半ば過ぎになると、食糧事情は急激に悪化してきた。終戦直後に一升九円だった米は、闇値で百円近くになっていた。三月十一日から咸興市

内の朝鮮人学生・生徒たちが、各学校輪番で「農地改革反対」のスローガンを掲げてデモ行進を始めた。「日本人をすぐに日本に帰し、日本人に配給している米を我々に回せ！」という要求もスローガンの一項目になっており、避難民は「もっと派手にやれ」と陰ながら応援していた。

ソ連軍が、南樺太行き漁業労働者を募集したのも、このころのことだった。日給三十一八十円、食糧・衣服も供与し、ソ連人と同じ待遇をするというものだった。何よりも、「十月には日本に帰す」という条件が魅力だった。だが子供の私には資格がなかったので、我が家には関係のないことだった。八百人応募して、三月末に興南港からカムチャッカに向けて出発した。

それまで途絶えていた、「帰国」のうわさが再び流れ出した。春を待ちきれない独身青年や若い夫婦たちの中には、三十八度線を目指して南下する者も現れてきた。三十八度線という国境ができたといううわさは、二十年十月ごろに聞いてい

た。三十八度線を越えることを、避難民たちは「突破」と称していた。突破という語感は一三十八度線の危険性を思わせた。私は、「三十八度線」という言葉からマジノ線、ジークフリート線のような要塞地帯かもしれないと想像していた。

三月に入ると、月末には帰国できるらしいといううわさが真実味を帯びて流れてきた。それを裏付けるように、三月末に墓地の修復作業が行われた。私たちは墓地の周りの道路や墓の崩れを補修したり、陥没した墓に盛り土を施した。二日目の作業の日に、私は板切れで妹の墓標を作り、休憩時間に建てに行った。

四月初め、私たち一家は福田さんの家を出て、近くの以前下宿屋だった家の二階に移った。無防備な家だった。ソ連兵の襲撃は相変わらず続いていた。昼間からソ連兵が襲って来る。私たちは、玄関のベランダで見張っていた。ソ連兵の姿が現れたら「警戒警報」と叫び、玄関に近付いたら「空襲警報」とわめく。すると女性は一斉に姿を

くられます。ソ連兵の中には、私たちの真似をして、「クシユケホ」と怒鳴りながら土足で廊下を歩き回る者もいた。夜の襲撃に備えて、昼間に偵察に来る者もいるから油断ならない。

下宿屋の十メートルほど先に、ソ連兵の慰安所ができていた。素人女性を守るため、元お女郎さんたちが、私設遊廓を開設した。高い黒板塀に沿って、日曜日にはソ連兵の行列ができたので、曆のない私たちは一週間の区切りが分かるようになった。

四月二十日過ぎに、日本人委員会から「一人二百円ずつ旅費を用意するように」という通達が出た。うわさは、ついに現実の姿となって現れた。しかし、疑い深くなっていた避難民は狂喜することもなかった。

城津から来た井上さんが、道庁の元種苗園に働きに行くので、一緒に行こうと誘ってくれた。日当は十円だという。二十日働けば旅費が稼げると勇んで出掛けたが、夕方、中国人の監督から「お

前は明日から来なくともよい」と、つれなく断られた。井上さんが、「体は小さくても大人と同じくらい働いていた」と、懸命にとりなししてくれたお陰で、「日当五円で働かせてもらえることになった。「四十日間働けばいいのだ」と自分で自分を納得させていたが、そのころには出発できないかと心配になった。

夕方には体の節々が痛んだが、たなこころ掌に握りしめた五円札と一束のハウレンソウが、着実に日本に近づけてくれるのだと思うと、晴々とした思いだった。しかし一週間もすると、仕事はあらかた終わり、お払い箱になった。

旅費はどうしようかと私は途方に暮れたが、大黒柱のいない我が家は、「生活困窮者」として旅費免除になった。

二月から、母は、ソ連軍将校官舎の掃除婦の仕事をしていた。その留守中の四月末、リンゴ園の姜さんが、「日本人が、帰国し始めているという話を聞いて」と言って妹の幸枝を連れて「幸ちゃ

んはこのままもらってしまいましょうと言う女房を、それはいけないと説得していたので、遅くなった」と、姜さんはしきりに弁解した。母の留守中に、「妹をくれ」と言われたらどうしようと思構えていた私は、姜さんが未練がましそうに帰ったので、ほっとした。しかし、妹は父と下の妹の死を初めて知り、大声で泣きだした。

ついに三十八度線を突破

昭和二十一年五月十四日に、威興からの南下列車第一陣が出発した。私たちにも、二十六日乗車の許可証が届いた。二十三日に、母と私は墓地に別れを告げに出掛けた。麗しき五月晴れの日だった。しかし墓地に近づくと、鼻をつまみたくなるような腐臭が漂ってきた。三月に修復した墓穴は、凍った土が溶けて五十センチメートルほど陥没していた。その上に陽炎が揺らいでいた。それは飢え、寒さ、病と戦いに敗れて葬られた死者たちの嘆き、悲しみの声のようでもあった。

妹の墓に、新しく作ってきた父と妹の墓標を建

てて手を合わせた。父がどこに埋葬されたか分からないので、それは致し方ないことだった。「昌子！ 父ちゃんと先に日本に帰って待っているんだよ。私たちもあとからすぐに帰るからね！」と、母は涙声で語りかけている。私は、「いつか必ず骨を拾いに来てやるからな」と心に誓った。幾度も振り返りながら、私たちは山道を下った。

夕方から雨になった。そして二十四日、二十五日と雨は降り続いた。すでに用意している荷物を抱いて、両足を眺める。何もすることがないので、荷物を広げて何度も繰り返し点検する。荷物の中には、ソ連将校官舎でもらった黒パンを固く乾燥させたものも入っている。「ソ連はすぐに気が変わるからなあ。早いところ威興を逃げださないと、帰すのは止めたとなるかもしれない」と、皆は気をもんだ。

五月二十六日、いよいよ痛恨の威興と別れる日がきた。長い長い夜が明けた。出発延期の通達もこなかった。前夜の雨も上がり、汗ばむほどの日

本晴れとなった。正午集合だったが、下宿屋の裏の空き地には、一時間以上も前から避難民や咸興在住者が集まり始めた。二時過ぎ、行列は駅前広場に向けてのろろと動きだした。広場には二千人近くの日本人が詰めかけ、地区別、班別に列車の割り当てが行われたが、作業ははかどらない。列車に乗り込んだのは夕方五時過ぎで、全員乗り終わっても列車は発車しない。みんなは、おとなしく狭い貨車の中で一晩中待っていたが、長い汽笛を引きずりながら列車が走り出したのは、翌日の朝九時ごろだった。

列車はスピードを増し、あっという間に城川江の鉄橋を渡り、咸興を離れてしまった。しばらく走って、列車は富坪駅に一時停車した。お寺のような朝鮮家屋式の駅舎だった。ホームの標識を見て、「フウヒョウ」が漢字で「富坪」と書くのだと知った。「富坪」という文字を見た瞬間、背筋に戦慄が走った。四月末に幽鬼のように痩せ細った十四、五人の孤児たちが咸興に帰って来て、盤

龍台町錦町国民学校横のお寺にあった孤児収容所に入れられたのを見たことがある。

富坪で生き残りの避難民を収容して、列車は再び走りだした。途中、何度も停車を繰り返して、八時間後の午後三時に元山に到着、夕方までそのままだった。皆は恥も外聞もなく、いつでも貨車に飛び乗れる態勢で、貨車のそばで用便をしていた。元山駅の引込み線には三編成の列車が待機していたが、四時、五時と相次いで発車、六時には私たちの列車も動きだした。列車は相変わらずのろろ運転で南下していた。

貨車の壁にもたれて、私はいつの間にか眠っていた。早朝のことだったが、列車の前方が騒然となり、「早く降りろ」と言う保安隊員の命令が聞こえて、外から貨車の扉が引き開けられた。ホームの標識には「三防」とあった。外には青い朝靄が立ち込めていた。

ここで列車輸送は終わったのだった。あとは勝手にどこへでも歩いて行ってくれということらし

い。「三十八度線までは六十里だ！」前の方から情報が伝えられてきたが、日本里か朝鮮里か分からない。朝鮮里だろうと考え、ほぼ百キロメートルぐらいと見当をつけ、二週間がかりかなと覚悟を決めて歩き始めた。三防は景勝地だというが、景色を眺めている心のゆとりはない。

新井里という部落の外れの山の中で、手に鎌を持った若い朝鮮人に捕まった。たどたどしい日本語から察するに、「山口県から帰って来たが、山口で日本人に二千円取られたから、お前たちが弁償しろ」と言っているらしい。運良く福溪から来たという保安隊長が通りかかり、難を逃れた。

福溪を過ぎると、街道は真っ直ぐ平康につながっていた。平康から鉄原まで二十キロメートルぐらいあるという。鉄原はソ連兵がいて危険だから迂回しようということになり、平康の手前から街道を避けて山の中の道を歩くことにした。山道は大勢の避難民が歩いたらしく、道は踏み荒らされて幅が広くなり、白く乾いて土埃を立ててい

る。白く乾いた道を見つめながら、ただひたすら歩くだけだった。

ようやく京畿道漣川郡に入った。漣川から三十八度線まで二里だという。道を教えてくれた親切な朝鮮人の老人は、「もう少しの辛抱だから頑張りなさい」と励ましてくれた。疲れが一気に吹っ飛び、足取りは軽くなった。しかし、漣川にはなかなかたどり着かない。十キロメートルほど歩いて大きな川に着いた。渡し船の船頭に聞くと、「漣川はあっち」と東の方を指差した。

小さな山の中で二股の道があった。父が亡くなったから、母は何かと私に判断を求めるようになっていた。「どっちの道を行こうかね」と尋ねられて、判断に迷った私は、杖代わりにしていた木の枝を倒して、右手の道を選んだ。あのとき、西の方に大きく道をそれていたのだと気が付いた。

「漣川に行っても三十八度線の全谷鉄橋にはソ連兵がいて通さない。日本人はみんなここを通

る」と船頭は言った。船に乗り合わせた避難民は、川岸の背の高い草原の砂地で野宿の準備をした。「ソ連兵に見付かったら大変だから、火を燃やすのは止めよう」ということになり、有り合わせのもので腹ごしらえした。いよいよ三十八度線を越えるのだと思うと眠れない。

翌日、道路の傍らの農家に寄ると、庭に筵が敷かれ、大釜にお湯が沸き立っていた。白いチョゴリの老婆がたどたどしい日本語と朝鮮語で「かわいそうな日本人のために、毎日お湯の接待をしている。三十八度線は近い。ゆっくり休んで行け」と慰めてくれた。

三十八度線は、鉄条網と塹壕、トーチカなどで覆われた要塞地帯だと想像していたが、それらしきものは見当たらない。農家を出て一キロメートルほど行くと、切り通しの道は下り坂になった。小さな松林を抜けると、目の前がぱっと明るくなった。道の両側は黄色く実った麦畑が広がっていて、道路の先には白黒まだらに塗り分けられた

遮断機があった。

遮断機の前にはソ連兵の姿はなく、十五、六人の避難民がいた。左手の藁屋根の朝鮮家屋に赤旗が翻っていて、煙突からは煙が立ちのぼっていた。歩哨のソ連兵は昼食に行っているらしくかった。みんなは、「これが本当に三十八度線なのだろうか？」と狐につままれたような顔をしていたが、「黙って通り抜けて、いきなり撃たれてもかなわないなあ？」とか、「こんなだったら、去年のうちに突破するんだった」などと、口々にしゃべっていた。

二十分ほどして、マンドリン（自動小銃）を肩に掛けた小柄なソ連兵が現れて、「一人当たり五円ずつ出せ」と言う。ソ連兵が広げた両手に一円（茶色）、五円（緑色）、十円（紫色）の軍票を投げ込んだ。桃色の百円札も一枚あった。南朝鮮に行ったらソ連の軍票は通用しないと分かっていたから、気前よく差し出した。さすがに朝鮮銀行券を出した者はいなかった。威興では朝鮮銀行券の

方が信用があり、朝鮮人は軍票を受け取るのを嫌がっていた。

ソ連兵はみんなを遮断機の前に整列させた。それから勿体ぶったしくさで遮断機のバーを上げ「ハラッショ」と、南の方を指さした。みんなは思わず「スパシーパ」と礼を言ったが、それに対して「ダスビダーニャ」と、ソ連兵は陽気に応じた。皆急ぎ足になる。後ろから「待て!」、「戻れ!」と言われそうな気がして背筋がむずむずする。五百メートルほど行くと、道は左にカーブしてソ連兵の姿は見えなくなった。

先頭の人が走りだした。つられてみんなも走りだした。先頭の人たちが走りだした地点に着くと、道路のわきに三十八度線の標識が立っていて、道路の中央に横文字と共に、38という数字が石灰で書かれていた。私たちは、その上をびよんと飛び越えた。昭和二十一年の六月四日か五日のことだった。ついに三十八度線突破したのだ。威興を出て十日近く経っていた。38という数字を

飛び越えた瞬間に、名状しがたい恐怖感が襲ってきて、私も狂気のように走りだしていた。

松林の陰で横になり、みんなはしばらく息を喘いでいたが、そのとき突然に一人の女の人が、悲鳴のような声を上げたと思うと、大声で泣きだした。その叫び声は、死んだ我が子への痛切な呼びかけだった。三十八度線を、手を携えて突破することができなかった我が子への悲しみがたぎっていた。それはたちまち周りの女、子供に伝染した。見知らぬ者同士だったが、みんなは手を取り合って慟哭した。

しかし、苦難は終わりを告げたわけではなかった。三十八度線で気力を使い果たした避難民は立ち上がり、京城目指して歩きだした。高浪浦で一泊、臨津江を平底の舟で渡り、山の駅前で野宿、そして開城に列車で送られた。このとき、列車が北に逆行するのに気付き「北に追い返されるぞ!」と大騒ぎになった。開城では、百張り近くの大テント村に収容された。ここでコレラの予防

注射を受け、一週間滞留した。釜山はコレラが流行しているために、乗船港は仁川になったという。仁川では七千五百トンのリバティー船に、定員二千五百人のところを四千五百人も詰め込まれたので、甲板の上まで足の踏み場もなかった。

昭和二十一年六月十七日、三歳のときに渡鮮して、十二年間を過ごした朝鮮に別れを告げた。暮れなずむ朝鮮の山々を眺めながら「必ず骨を拾いに帰って来るぞ!」と、再び心に固く誓った。船上では、並木路子の「リンゴの唄」と、田畑義夫の「かえり船」が繰り返しスピーカーで流されていた。

博多港には三十隻近くの引揚船が停泊していた。検便の結果、異常なしということで上陸許可が下りたのは、六月二十三日のことだった。咸興を出て一カ月、會寧を避難・脱出して十カ月と十日目のことだった。埠頭には、大邸から復員した長兄と博多にいた兄が出迎えていたが、「連絡では赤尾緑以下五人となっていたから、親父が死ん

だと分かったが、あと一人は誰だ」と、長兄はいきなり尋ねた。

博多港で、白いDDTを頭からかけられ、私たちは避難民から引揚者に変身した。

生き抜いて、今!

東京都 中村 登美枝

一 ソ連軍侵攻

昭和二十(一九四五)年八月九日、朝鮮咸鏡北道の慶興郵便局に勤務していた私(旧姓香川)は、同僚三十人と共に深夜の一時に局に集結を命ぜられた。当時十九歳だった。その日、突如として対日戦争を布告したソ連軍は満州を一举に南下してその先頭はもう、ここ慶興の目前にまで迫っていた。

鮮満国境を流れる豆満江の対岸にある関東軍の陣地が、赤々と燃えていて遠雷のように響く砲撃